

オープンプラットフォーム会議 Vol. 3の 開催概要をお知らせします

日 時：令和元年 11 月 15 日（金）18:30～20:45

場 所：別府市役所 1 階レセプションホール

内 容：基調講演／元文部科学省社会教育課長 神代浩氏

アイデア発表／中野伸哉氏・古庄優子氏・山出淳也氏・宮川 園氏・

ディスカッション／神代 浩氏・中野伸哉氏・山出淳也氏・馬場正尊氏

出席者：134 人

うちアンケート回収 73 件（67%）（集計結果別紙）

うち質問用紙提出 25 件（詳細別紙）

市長あいさつほか

本日は、ゲストのトークを聞いていただきながら、皆さん方の御意見をくみ上げ、しっかり役立てていきたい。

造っていく前からのプロセスの方がむしろ大事で、ラグビーもレガシーが大事ということで、周囲の皆さん方や子どもたちに一体何を残していけるかということ、私たちはそのことにこだわってやってきた

新図書館も、どんな人たち、プレイヤーによって運営されていて、どんな人たちが使い、どんな人たちに役に立っていくのかということが大事だと考えている。

策定委員会の委員会の中では、役割や機能に応じて、壁やドアで分断する、いわゆる従来の箱ものではなくて、利用する人の流れや時間の経過とともに多様な機能や役割を果たす新しい空間、そして、利用する方が自分事として使っていただけるような空間という方針を出している。

新しい空間とは、一体、誰のためのものかということを考えていただきたい。もちろん市民の皆さまのものだが、それは今、住んでいる人だけではなくて、これから住むであろう人、これから生まれてくるであろう人、そういう人のことも想像しないといけない

20 年後、30 年後、活字離れがきつと進むであろう時代にあっても新しい空間には多くの人に来ていただきたい。そのためにはいろんな人が入って来れる入り口、これが開かれていることが重要なポイントだと考えている。

基調講演／元文部科学省社会教育課長 神代浩氏

文部科学省の社会教育調査のデータによると、図書館数が増えているので、それに伴って、職員の数も増えているが、非正規の割合が非常に高い。これは、指定管理者の割合が増えているということである。

2009年、私は社会教育課長として、当時の元気のなさそうな図書館を何とかうまく活性化する手段がないだろうかということで、鳥取県立図書館で開かれたイベントに参加した。そこで図書館の新たな可能性、より正確に言えば、古くて新たな可能性を身を持って体感した。鳥取県立図書館に行くと、例えば、いじめについての関連する本があり、見開きには、法令関係、新聞のデータベースの調べ方、レファレンスサービス、県内のいじめ相談センターの窓口の情報が提供されている。

その前年、2008年にリーマンショックで大量の派遣切りにあった方を救済するために日比谷公園の年越し派遣村ができたことに思いを寄せ、図書館員たちに図書館に何かできることはないか聞いてみたところ、様々なアイデアや実践が生まれた。これを機に、2010年の1月に発足させたのが、「図書館海援隊」というネットワークで、住民の課題解決支援を公共図書館の不可欠な事業として推進発展させる、そういう意気込みをもってサービス提供をしている図書館（司書）のネットワークである。

自治体図書館の中には、自治体や企業、住民の抱えている課題について、この図書館の司書はどう考えているのだろうかという疑問になってくるものもある。展示棚から「今日」（注：社会が抱える今日的課題）が感じられず、まるで社会から切り離されたサンクチュアリのような図書館になってはならない。図書館と関わりなく過ごしている7割の人にとって、図書館の展示棚を見て、失業や不景気で明日の生活にも困る人もいるときに何を言っているのやら。所詮、自分たちに図書館なんか関係ないと言われても返す言葉はない。

いまだにこういう意識でやっている図書館も残念ながらたくさん見ている。しかし、別府市にこれから造る図書館はこういう図書館であってはならない

北海道の滝川市立図書館は、自分たちの入っている市庁舎の市役所のビルの2階を全部ワンフロア開けて、図書館にした。そうすると、市の職員と図書館員との距離が縮まって、行政と図書館との連携がうまくいくようになり、また行政側のサービスも図書館の資料を使ってより充実し、図書館にもいろんなニーズの人たちが集まってくるという思わぬ効果を生んだ。

大多数の皆さんがイメージしている図書館は、ただで本が読めて、貸し出しができる所かもしれないが、それは図書館の役割のごく一部にすぎない。もっと多くのことが図書館にはできるし、そういうことが求められている公共施設であるということをぜひ、皆さん、今日は心に留めていただきたい。

今日は、無料で本が読めたりとか、借りたりする以外のどんなことができるんであろうかということ、特にアートとか福祉の視点から、後のパネラーの皆さんと一緒に考えていきたい

プレゼンテーション／中野伸哉氏、古庄優子氏

（中野氏）

別府は温泉が有名な場所ぐらいにしか思っていなかったが、病院や福祉施設が多いので、障害者アートとか福祉、医療に着目して、別府の魅力を表立って表現して、この際、温泉は2番目か3番目ぐらいに引き下げて、医療や福祉をクローズアップしてほしい。

(古庄氏)

アートストレージ事業を行っているが、訳すと「芸術の保管庫」の意味で、具体的には、大分県在住の美術作家の作品とデザインコラボレーションの橋渡しをするという事業である。現在作家は 8 名登録していただいております、作品の画像データを印刷物や商品パッケージ、テキスタイルとかアートグッズなどのデザインに有償でご利用いただけるシステムを構築している。

アール・ブリュットとは、正規の美術教育を受けていない作家による個人的普遍的な作品を意味するが、まだまだ可能性がある。抱えきれないぐらいの作品がたくさんある。これらをデータベース化することで、もっともっと価値を深めることができる。

自分自身は、好きなことを仕事にしようと思って始めたが、情報がどんどん集まってくるようになった。図書館は情報が集まってくる場所でもあるので、アール・ブリュットも図書館で何かの役割の一つになるといい。

プレゼンテーション／山出淳也氏、宮川園氏

(山出氏)

別府市には 2009 年以降に 120 人以上のクリエイター、アーティストが移住している。別府市の人口の 0.1 パーセント。もっと市として活用・活躍できる場があったらいい。

一般的に本が好きな人は市民でも 2 割ぐらいしかいないといわれていて、図書館が完成するときにはもっと多くの市民に活用してもらい、図書館に来てもらいたい。

クリエイターが図書館に関わる入り口として、ワークショップの講師としてアーティストが関わるとか、美術をする人が関わるとか、それによっていろんな人たちがここで出会い、さまざまな経験が生かされて、また、それが街の活性につながっていく。

全国的にも新しい図書館の在り方が生まれており、1 人で勉強したり、1 人で本を読んだりということだけではなく、本を通していろんな人たちとコミュニケーションをしていく、新しい発見をする。その仲間ができて、この町がどんどん活性化されていくといい。つまり、そういう形でアーティストの方も図書館に関わってもらえると一石二鳥だと思う。

(宮川氏)

建築を専攻し、記憶と食をテーマにモノを創ることにこだわってきた。

昨年 8 月、講師として招かれ、「たべもの建築家」として食べられる島を作るというテーマで、2 日間子どもたちと一緒に材料、食材などを使って全て一から島を作って、最後にみんなで食べるというワークショップを実施した。

壁、床、天井がなくても、そこにシートを広げて、人が集まる行為をつくることができれば空間になり、思い出になる、それを私は「建築」として定義して、それを食べ物でやるというのが「たべもの建築家」だと思っている。

プレイヤーを育てるためにも必要な知識だったり、記憶がちゃんとデータとしてある図書館だといいい。文化に対する発表が評価される軸ができれば、文化が育つと思う。文化を創り、活用し、それ

を発表したり評価されたりする場所ができると、別府市がそういう超クリエイティブな都市になっていくのではないかと。

会場ディスカッション／神代浩氏・中野伸哉氏・山出淳也氏・馬場正尊氏

※受付時に質問用紙を配布し、休憩中に記入、提出されたものの中から事務局が抽出して、ディスカッションテーマとした。

1 プレゼンテーション感想

○神代氏

さすが別府。本当におもしろい人たちが集まっているなと感じた。

図書館として、お話しいただいたようなことをどう受け止めたらいいいのかということ、実はそんなに難しい話ではない。例えば、図書館でいえば、ビジネス支援とか、それから、今日もご説明したようないろんな形の支援を行っている。例えば、この別府で起業したいと思っている人たちに向けて中小企業診断士の方に来てもらい、図書館の会議室を使って相談会を行い、図書館が持っている多様なデータベースを持ち込むと講演する側もやりやすい。ちゃんと資料があって、エビデンスがあって、紹介できるようになる。それは図書館にとっては、本来のサービスとしても成り立つ。アーティストの皆さんがこの図書館で活動するにあたって、アートに関わる本、あるいはたべもの建築であればそういう料理や材料に関する本も一緒に提供することでより豊かなものがつくれると。それがまさに図書館の中で行う意味であり強みじゃないかと思う。

○中野氏

外国の方が多い。多様性がある都市なので、その海外の方たちの文化も取り込んで、これから図書館が機能する場合、その魅力としてさまざまな国の方たちと足並みそろえていけるような図書館になればいい。

○山出氏

図書館も今までの在り方だけではなくて、大切にすべきことはしながら別府らしいやり方を模索すべき。別府にしかない価値を見つけたい。そのためには、街のアーカイブというべき図書館の中でいろんな先人たちの知見、思い、技術、経験などが詰まっている書籍を使いながら、さまざまな新しい体験ができるラボみたいな場所が図書館の中にあって、そのラボの運営や、そういう場所を使ってワークショップをする。別府にはそんなアーティストがたくさんいる。そういう新しい実験施設みたいなことが図書館の中に入っても共存できそうだし、景色として想像すると幸せそうだなと思う。

質問・意見

一言カード1

「図書館の図書はカバーリングをして納品をしていただくが、そういった図書の整備などを障害者施設でも一緒に協力してできるのではないかと。長崎県立図書館では福祉施設と共同で既

に運営をされている」

○神代氏

カバーリングなどを障害者の施設に委託しているような図書館が実際にある。
書店との関係を考えるとき、図書館と地元書店の共存共栄を図るとよい。

○中野氏

今日ここに来る前、太陽の家に行ってきた。来年3月に太陽の家でミュージアムができる予定であり、太陽の家がアートと関わる連動が生まれることを期待している。

一言カード2

「鶴見丘高校2年生。図書館の完成時、私は別府を離れているが、これから入学してくる後輩たちのために勉強スペースを作っていただきたい。立ち寄りやすい空間ができれば図書館がきっと活気付くと思う。」

○神代氏

学生たちが宿題をやるために閲覧のためのテーブルを占拠してしまって、本を読みたい人が使えないという対立関係が生まれやすい。武蔵野プレイスのティーンズフロアが参考になるが、一方で中高生たちにとっても、宿題のついでに新たな本に出会えるような仕掛けは、これは図書館側に工夫する必要がある

一言カード3

「図書館とアートをつなげる必然性を感じられない。アートに必要なのは空間であって、図書館ではない。美術館にも図書館にもよくない気がする。」

○山出氏

もう少し幅広く捉えていてもいいと思う。料理は、ある面からいったらアートのようにも見えたりもするし、一方で、料理は料理だったりする。図書館は、もちろん1人で学んだり、見つけたりということもあるが、図書館に行ったら、こんな本があるんだと気付くことがある。同じようにその場で新しい経験を見つけたり、出会ったりするのもすてきだと思う。図書館の中にアートの展示ができる場所があってもいいし、もっといろんなことと出会える場所になったら、子どもたちにとって幸せなことだと思う。

○神代氏

アーティストとして自分が成長していく上でのきっかけをつかむための、たくさんの情報なり、ヒントなりが図書館にはある。まず、そういうつもりで利用していただくことから始めるのもありだと思う。

一言カード4

「図書館機能の優先順位は何と考えるか。」

○山出氏

図書館でも美術館でも同じだが、本がそこにきちんとあることが重要で、そこでしっかりといろんな学びや知見を得ることができるということが基本だと思う。

○中野氏

アートって分からない。分からないからいろいろ考えて知ろうとする、分からないって素敵だと思う。

○神代氏

「図書館は命を救う」と言い切ったとき、設置する側、運営する側がいくら頑張ってもそれは限界があって、やっぱり利用する皆さん方がそういうふうに感じられる、実感できる所でなければならぬ。そういうふうに感じられるような機能やサービスを図書館側から皆さんに提示できるかどうか、提示することが図書館機能の最優先に置かれるべきことではないかと思う。

会場意見1

「優れた図書館員と、それと市民を結び付けることができるかどうか重要ではないか」

○馬場氏

前回のオープンプラットフォーム会議のゲストで来られた紫波図書館の手塚さんは、本当に町のため、町で住む人たちのために司書はどうあるべきかと問い続けてる方だった。そういう司書や職員を今後募集することになると思う。

会場意見2

「アートってよく分からないものと言われたが、よく分からないものの中に図書館を放り投げてほしくない。美術館は美術館で別に造っていただきたい」

○馬場氏

図書館の図書館としての基本機能はしっかり押さえなければいけないということは前提としつつ、そこが基軸になって、それから別府ならではの図書館とは何なんだろうということを模索している状況にある。

図書館としてのよりどころ性、基本性みたいなものの重要性は忘れないようにしながら議論を進めていくように気を使いたい。

会場意見3

「図書館に期待するのは既存の学校システムの中に納まりきれない学びの場であるとか、教育のシステム。流れに沿えない子どもたちが図書館を逃げ場所として、そこでまた違う教育の在り方だったり学校では会えないような大人に会えたりできる場所・空間になるといい」

○神代氏

とっても貴重なご意見。まずは、学校図書館をいかに図書館らしくするかっていうことで、学校も考えなければならないが、公共図書館側もいろんな形でサポートできるような形がいいと思う。

会場意見 4

「観光業者の多面的なおもてなしの地域の心構えを知識面でバックアップできるような図書館にしてもらいたい。」

○神代氏

(図書館海援隊として、温泉地に本拠地を持つ J リーグのクラブチームとコラボした取り組みを紹介。) 観光への刺激や活性化に対しても図書館は大いに貢献できる

会場意見 5

「子どもと 2 週間に 1 回、今の別府図書館を利用している。私は今の図書館が大好き。10 年たって、やっぱり前の図書館のほうがよかったと思わないように素晴らしい図書館を造っていただけたらと思う。」

○馬場氏

思い出の場所になる図書館を、心して作らなければならないと皆さん思っていると思う。